

Drugstar Cereb

ドラッグスター セレブ

対話型電子薬歴管理システム (標準搭載)

「かかりつけ薬局」から「かかりつけ薬剤師」へ



薬物代謝酵素 チトクロームP450 (CYP) 相互作用データベース

今回のバージョンアップで、相互作用チェックデータベースをより充実させ、薬物代謝に関与するP450 (CYP) の情報を付加しました。
患者さんをフォローアップする上で大切な情報として薬剤師を支援します。



充実のデータベース

- 添付文書DB
- 相互作用チェックDB (CYPチェック機能を付加)
- 指導文DB
- 過去の指導文 (2次活用)

【注意】

CYPチェックデータはMEDISが提供する医薬品添付文章中の相互作用段落の文章から、CYPに関する情報を抜き出したもので、製薬企業による添付文章改定に伴い情報は追加又は削除されるものです。生体内で実際に発現する相互作用は日々研究途上にあることを認識すべきで、この情報は患者さんの服薬指導の延長線上において、患者さんに発生するかもしれない有害事象の早期発見に活用されることを期待するものです。

添付文章中におけるCYPに関する添付文章中の具体的記述例 (原文)

- マレイン酸フルボキサミン デプロメール錠25 25mg1錠
相互作用序文
本剤の代謝には肝薬物代謝酵素CYP2D6が関与していると考えられている。
また、本剤は肝薬物代謝酵素のうちCYP1A2、CYP3A4、CYP2D6、CYP2C19を阻害し、特にCYP1A2の阻害作用は強いと考えられている。
- 塩酸メキシレチン メキシチールカプセル50mg 50mg1カプセル
相互作用序文
本剤は、主として薬物代謝酵素CYP1A2及びCYP2D6で代謝される。

上記の添付文章情報より、下記のメッセージを出力します。

「マレイン酸フルボキサミン」は「CYP1A2」を「競合」的に阻害し、併用薬である「塩酸メキシレチン」は「CYP1A2」により「代謝」されるので、「塩酸メキシレチン」の代謝は抑制され、その作用が増大する可能性がある。
添付文書上、両薬の併用は「要注意」であると言える。

東日本メディコム 株式会社



山村重雄先生

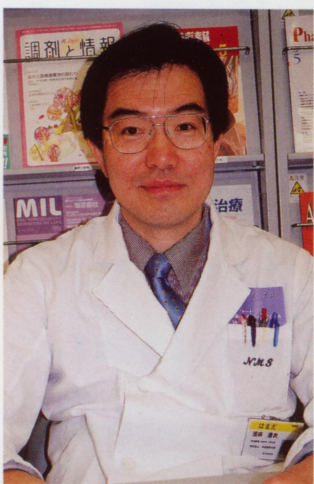
東邦大学 薬学部助教授 医薬品情報学研究室

薬剤師の社会貢献とは、“くすりが開発されて医薬品となり、患者様に投与されて体内から出て行くまでの薬の一生を、それぞれの時点で正しく評価することにある”と言えるでしょう。正しく薬を評価するためには様々な情報が必要ですが、今ではコンピュータで管理することによって多くの情報を短時間に得ることが可能となりました。しかし、いかに多くの情報があろうと、患者様が副作用や相互作用にさらされる危険性は依然ゼロではありません。副作用、相互作用がチェックできる医薬品の適正使用に欠かせない基本情報の一つに医薬品添付文書がありますが、記載方法の不統一などから、必ずしも医療現場で使いやすい形で提供されているとは言い難いのが実情です。特に、相互作用で重要なCYPの酵素阻害、酵素誘導に関しては、添付文書中の記載箇所、記載方法、用語の不統一などからデータベース化が困難であり、患者さんを前にして役立つ相互作用チ

ェック用のソフトウェアはこれまで存在しませんでした。薬物代謝酵素チトクロームP450 (CYP) 相互作用データベースは、添付文書の全文検索エンジンを開発することによって、CYPに関連する用語をすべて抽出し、添付文書ベースのCYPに関連した相互作用のデータベース化を初めて可能としました。この、システムの特徴は、添付文書の改正に伴うデータの更新が容易であることもあげられますが、なによりも、目の前の患者様に起こりうる相互作用を、その場で服薬説明できるメッセージを出力することにあります。これによって、薬剤師は患者様からの情報収集に専念でき、患者様を副作用や相互作用から守ることへとつながると期待できます。これこそが、薬剤師が行う薬の評価といえるでしょう。

薬物代謝酵素チトクロームP450 (CYP) 相互作用データベースはそんな薬剤師の職能を応援するシステムです。

電子薬歴は遂にCYPチェック機能までも手に入れました



浜田康次先生

日本医科大学付属千葉北総病院薬剤科 医薬品情報室 係長

今、薬剤師は新たな岐路にたっている。高齢化社会の急激な進展にともない、複数の疾患に罹患した高齢者が急増。日常的に多剤併用が行われている。多剤併用の弊害は、1993年に15名もの犠牲者をだし、大きな社会問題となった「ソリブジン薬禍」が記憶に新しい。ソリブジンとフルオロウラシル系抗癌剤の併用により、重篤な血液障害を発症。わが国で初めての薬物間相互作用型の薬害である。薬物代謝の研究、とりわけチトクロームP450 (CYP) の分野は著しく進歩。多数の分子種が明らかとなった。CYP1A2、2C9、2C19、2D6、3A4が臨床上重要であるが、グレープフルーツジュースなどの飲食物やセントジョーンズワート（西洋オトギリソウ）などのハーブ類との相互作用、さらにはP-糖タンパク質などのトランスポーターや遺伝的多型 (CYP2C9、

2C19、2D6) の存在も問題を複雑化している。これらを回避するためには、代表的な薬の相互作用を理解することが重要である。しかしCYPには基質、誘導、阻害などがあり、同一酵素を使うからといって、必ず相互作用があるわけでもない。最近、製薬企業も代謝を重要視してきて、日々情報が追加される。知らぬ間に、添付文書が改訂されていたということも十分あり得る。医療訴訟では、薬事法第52条により義務付けられた添付文書が拠り所となる。多剤併用が繁用されている今日、もはやIT (情報技術) の助けなしに、薬物相互作用を回避することはできない。相互作用、とくにCYP情報の充実は朗報であり、大いに期待される。これからは患者自身を相互作用から守ることだけではなく、自分自身を医療訴訟から守ることも視野に入れる必要がある。

●お問い合わせ

東日本メディコム 株式会社

●システム開発部

〒330-0038 埼玉県さいたま市北区吉野町2丁目177番地5
TEL: 048-668-1333(代) FAX: 048-668-2330

○本社 TEL: 048-557-3333(代)

○さいたま支店 TEL: 048-664-1733(代)

○水戸支店 TEL: 029-240-1911(代)

○横浜支店 TEL: 045-477-3333(代)

<http://www.e-medicom.co.jp>

○このチラシの内容は2005年9月現在のものです